

アンドレ・ジッドとピアノ

2023年11月4日

静岡大学 キャンパスフェスタ in 静岡

西村友樹雄（一橋大学等非常勤講師）

はじめに：ジッドとは誰か？

- 1947年にノーベル文学賞受賞
- 代表作『狭き門』『田園交響楽』など
- 日本では1930年代に「ジッド・ブーム」が起こり、戦後も代表作品はほとんど文庫で読むことができたが……



André Gide (1869～1951)

2023年11月現在、手軽に入手可能な文庫一覧

新潮文庫： 『狭き門』『地の糧』『田園交響楽』

光文社古典新訳文庫 『狭き門』『法王庁の抜け穴』『ソヴィエト旅行記』

岩波文庫： 『狭き門』

1. ジッドのピアノ遍歴

教育熱心な母親のもと、ジッドは7歳からピアノを始めるが、真の師と出会うまでには長い時間を要した。自身の誕生から結婚までを振り返った自伝『一粒の麦もし死なずば』（以下『麦』）では、彼が出会ったピアノ教師たちが（そのほとんどは辛辣に）描写されている。そこにはジッドのピアノ観、音楽観をうかがうことができる。

1-1 母の教養への執念（『麦』）

僕の母は、自分と彼女自身の教養にとっても気を配っていて、音楽や絵画、詩、その他目の前にそびえているもの一般に深い敬意を持っていた。母は、僕たち親子の趣味や見る目を高めるためにできるかぎりの努力をしたのだ。彼女は、展覧会に出かける時は、その展覧会を話題にしている新聞をかならず持っていき、間違ったほめ方をしてしまうことへの極度の恐れから、会場では批評家がどのようにほめているかをかならず読み返した。

1-2 ピアノ教師たちへの、母への不満（『麦』）

もし、僕がもっと早くにド・ラ・ニクス先生に託されていたら、彼は僕を素晴らしいピアニストにしてくれただろうに！ だが、僕の母は、初心者にとっては教師は誰でもよいという通念を疑っていなかったのだ。

1-3 生活のためのピアノ、調律されないピアノ：ケクラン先生（『麦』）

この単純素朴な人には、芸術への興味関心よりも、生活費を稼がねばという強い欲求が感じられた [……]。

もう少し大きくなると、僕は彼女の家にレッスンを受けに行くようになった。[そこに
ある] ピアノの高音部のいくつかはひどく調律が狂っており、連弾で高音を受け持つ気持ち
を弱めた [……]。そんな時彼女は、まるで幽霊にひそかに命令するかのよう、「調律
師を呼ばなければね」というのだったが、幽霊はその命令を果たさないのだった。

1-4 数学のような演奏：メリマン先生（『麦』）

メリマン先生は、[ピアノ会社の] プレイエルの試奏者だった。彼は、まったく適正も
ないのに、ピアニストを職業に選んだ。僕の勘違いでなければ、彼は大いに練習に励んだ
結果、音楽院で一等賞を獲得したのである。彼の正確で、きらきらして凍り付くような演
奏は、芸術というより数学に属するものだ。

毎週二回、彼は時間に正確にやってきた [……]。

「次回までに、これに続く 8 小節を練習しておきなさい」

説明は全くなかった。僕の音楽の好みや、感受性に訴えるものなど一切ないのは当然で、
僕の記憶力や判断力に働きかけるものすらなかった。

1-5 ピアノの師、音楽の師、人生の師：ド・ラ・ニクス先生（『麦』）

これまで僕の受けてきたピアノのレッスンのお粗末さや、よりよいレッスンがもたら
しうる恩恵に初めて気がついた母は [……]、最も優れた教師の 1 人であるマルク・ド・
ラ・ニクス先生に僕の音楽教育をゆだねた。

先生のもとで、すべては活気づき、光り輝き、和音の規則がもたらす制約にこたえつつ、
繊細に分析されまた総合された。そう、僕は理解していったのだ。[キリストの] 使徒た
ちは、おそらく自分たちのもとに聖霊が降りて来たときに、僕のそれと似た激しい感情を
感じただろう。これまできちんと理解することなく、音としてただ繰り返すだけだった聖
なる言語を、突然に話すことができるようになった、そんな風に僕には思われた。

2. ジッドにとってのピアノ

小説家ジッドにとって、ピアノとは創作活動に欠かせない大事な道具だった。また、ピアノ演奏とは自分自身との対話であり、同時に楽曲や楽譜との、また作曲家との親密な対話にはかならなかった。そのためひとりきりで演奏することを好んだ。

2-1：ピアノの練習と小説執筆（『日記』1924年10月）

バッハに熱中する（『オルガン組曲』と『フーガの技法』）。

〔……〕

〔現在執筆中の小説である〕『贋金つかい』はピアノの練習のようなものだ。難点を乗り越えられるのは、必ずしもそれにやたらと固執したり、そこで足踏みしたりすることではない。その隣にある別の難点にとりかかることで乗り越えられることが、実によくあるのだ。

2-2：ピアノの練習と小説執筆（『日記』1924年11月）

実によく仕事ができている（……）

ピアノの練習も快調。バッハ、アルベニスそしてショパン。

2-3：見られてはいけない演奏（『日記』1929年11月）

僕はショパンの『前奏曲集』を、自分でも満足するように、それを聴いた人を驚かし大喜びさせるようなやり方で弾けた。しかし、誰かがそこにいたり、僕の演奏を聴いていることに気づいたりしたら、僕の演奏はとたんに凍り付いてしまったことだろう。

2-4：友人ジャック・コポーの証言

モーツァルトやショパンの完璧な音色に誘われた私が、寝室を出て、忍び足で階段を降り、客間の扉を静かに開けたとしても、私が客間に入る前に、その音は途絶えてしまい、ピアノの蓋が閉められる。ジッドは謝る。多くの教師たちに秀でるであろう技芸をもつジッドだが、彼にとってはあくまで練習の対象、自分を鍛える機会でしかないのだ。この自己との対峙は孤独を必要とする。

2-5：ショパンとの対話？（『ショパンについての覚え書き』）

「あの人達の演奏を聞かないでください〔……〕。あの人達が作り上げた私の姿については、私のほうがあなたよりもずっと苦しんでいます。自分ではないものを自分としてとられるよりは、無視されたほうがましです。」ショパンがこう私に語りかけてくれなかったら、私は受けをねらった華美な曲を量産するものとして彼を大嫌いになっていただろう〔……〕。

3. ジッドの理想の演奏

ジッドは、「ショパンとは他の誰よりも、どんな作家とよりも長く一緒に時を過ごした」と語っている。それだけに思い入れも尋常ではなく、他人の演奏のほとんどは彼にとって真のショパン像をゆがめるものとしてうつつた。では彼にとって理想のショパンの演奏はどのようなものだったのだろうか？

3-1：自分こそがショパンをうまく弾くことができる？（『日記』1934年2月）

バッハを私よりうまく弾く人間はたくさんいるだろう、ただショパンは違う。芸術家であるような音楽家が持てるような特殊な理解力が必要だ。

3-2：『前奏曲』ハ長調のあるべき解釈（『ショパンについての覚え書き』）

この音楽は〔……〕まったくくつろいで弾かれなければならない。いかなる緊張も、努力も感じてはならない（「嵐に至るまでに強調されるアジタート」とは逆に、この曲はその全体があたかも美しく静かな一つの波のように演奏される必要がある）。

3-3：皆ショパンを早く弾きすぎる！（『ショパンについての覚え書き』）

ショパンの曲一般に言えることだが、人々が一般にやるよりもずっと遅く演奏したならば、その時初めてショパンの音楽を〔聞き手に〕理解させることができるだろう。

おわりに：フィクションの中のピアノ

ジッドにとってかけがえのない価値を有していた音楽やピアノは、彼の小説においてもしばしば極めて重要な役割を果たすことがある。『狭き門』の場合を見てみよう。

1 ジェロームの回想（『狭き門』）

夜になりサロンに入ると、私は、いつもの場所にピアノが見当たらないことに驚いた。「ピアノは修理に出しましたよ」アリサはこれ以上ないほど落ち着き払った声で言った。「ここ最近、空っぽの音しか出なくなってしまったから、ジェロームでさえもいい音を出せないと断言しますよ」

2：アリサの日記（『狭き門』）

私はピアノを練習することが好きだった。